

自己実現の発生機序と昇華

石 田 潤

人は誰も自分の能力や本性を存分に発揮したい、そしてそのことを通じてより自分らしくなりたい、という願望を持っている。このような自分の持っている能力や本性を存分に発揮し、より自分らしくなることを、ゴールドシュタインやマズローは「自己実現」と呼んでいる。マズローやゴールドシュタインによれば、自己実現を求めることは、人間の持つ基本的な欲求や衝動である。そして、人は自己実現によって、喜びや幸福感を感じることができる。

また、マズローの考えによれば、自己実現はその度合いは人によってさまざまであるものの、誰もが多かれ少なかれ自己実現を成すことができる。この点について、マズローの初期の考えでは、自己実現はごく限られた人にしか果たせないものであった。しかしながら、後年、マズローはそのような考えを改め、誰もが自己実現を経験することができると考えている。マズローによれば、「だれでもなんらかの至高経験においては、一時的に、自己実現する個人にみられる特徴を多く示すのである。つまり、しばらくの間、かれらは自己実現者になるのである。……このことは、われわれがその静的、類型学的欠陥を一掃し、極くわずかの人が六十歳になって入ることのできる悉無律の神殿とはしないように、自己実現を再規定することを可能にする。([『完全なる人間』p. 123])」のであり、また、「自己実現とは、完全に熱中し、全面的に没頭しつつ、無欲になって、十分に生き生きと経験することを意味する。……個々人として、われわれはすべて、時たまそういう瞬間を経験しているものである。([『人間性の最高価値』p. 56])」のである。このような考えによれば、自己実現は誰もが望むことができるものといえるであろう。

では、自己実現はどのようにして発生するのであろうか。また、どのようにすれば自己実現を成すことができるのであろうか。実は、このような点については、マズローの見解は必ずしも明らかではない。

マズローは、人間の持つ生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、という4つの主要な欲求の上位に立つ最高位の欲求として、自己実現の欲求を位置づけ、その自己実現の欲求によって、自己実現が促されると考えている。そして、自己実現を成すためには、人の内部に備わっているこの自己実現の欲求を抑制したり、抑圧したりしないよ

う、積極的に解放することが大事であることを述べている。また、自分の能力を表出するために必要となる技能を習得することや、能力を最大限に発揮することによって得られる自分の最高の状態に対する恐れを克服することなども重要であるとしている。

以上のようなことは、確かに、自己実現を成すための有効な指針となり得るものである。しかし、自己実現が生じるときに、心の内部で何が起きているのか、そもそも自己実現とはどのような心の働きによって生じているのかなどについては、不明瞭なままであるといわざるを得ない。

そこで、本稿では、マズローのいう自己実現とはそもそもどのような心の働きなのか、自己実現が発生する時、心の内部でどのようなことが起きているのかについて、一つの試論を提示することにする。

マズローの理論とフロイトの理論

自己実現の発生機序を明らかにするための重要な足がかりになると思われるのは、フロイトの提示した「昇華」についての考察である。

一般的な受け止め方としては、マズローの理論とフロイトの理論とは、水と油とまでは言わないまでも、かなり異質なものとして扱われている。その最大の理由として考えられるのは、マズローが人間の本性を善なるものとしてとらえているのに対し、フロイトが人間の本性を邪悪で狂氣的なものが潜んでいるかのようなとらえ方をしていると思われる点であろう。実際に、マズローはそのようなフロイト批判を明確に述べている。たとえばマズローは、「フロイトの人間像が不適當であることは、明らかである。抱負、実現できる希望、神的特質というものを、考慮の外にしているからである。（『完全なる人間』 p. 15）」と述べ、また「彼（＝フロイト）の犯したひとつの大きな誤りは、無意識を単に、好ましからざる悪でしかない、と考えたことである。（『人間性の最高価値』 p. 205）」と述べている。

しかしながら、その一方で、マズローはフロイトへの称賛も述べており、フロイトの業績については高く評価している。フロイトの著作物については、「フロイトは今でも、ヒューマニスティック心理学者が読む必要があるものである（彼の形而上学ではなく、その事実を）。（『人間性の心理学』序）」と述べ、心理療法におけるフロイトの功績については、「今世紀におけるフロイトやアドラーなどの画期的な諸発見に始まる心理学の進歩は、心理療法を無意識的な芸術から意識的な応用科学に変えてきた（『人間性の心理学』 p. 397）」と述べている。しかも、フロイトが性の欲動を人間の根源的な動因としていることについて多くの批判があるなか、マズローは人間の性行動に対してこだわりのない肯定観を述べて

いる(たとえば、「セックスを本来悪とみることは、人間主義的見地からはまったくナンセンスなことである。(『完全なる人間』 p. 248)」「至高経験を体験するための最も容易な二つの方法は(経験的報告に関する単純な統計によるものではあるが)、音楽と性行為であることを、報告しておきたい。(『人間性の最高価値』 p. 207)」など)。以上のことを踏まえるならば、フロイトの理論とマズローの理論とは意外に近い位置にあると考えることもできるのである。

しかしながら、一方のフロイトは、「われわれの多くのものにとっては、精神的活動と倫理的昇華の現在の段階へと人間を引き上げ、さらに超人にまで発展することを約束するはずの完成への衝動が、人間自身の中にあるという信仰を断念することは困難であろう。しかし私は、このような内的な衝動を信じないし、このような快い幻想をまもる手段を知らない。(『快感原則の彼岸』 p. 176-177)」と述べている。ここで「精神的活動と……(中略)……完成への衝動」は、マズローのいう自己実現の欲求とほぼ同じものを指していると考えられる。だとすれば、フロイトはマズローの理論の中核を成す自己実現の欲求のようなものの存在を明確に否定していると考えられるのである。

昇華の現れ方

では、マズローが自己実現という言葉で表した事象をフロイトはどのように説明しているのか。そこで考えられるのが、いわゆる昇華である。昇華とは、性的な欲動が対象や目標を換え、性的でない行動となって発現することである(「最も重要と思われたのは欲動の昇華という運命であった。この場合は対象と目標とが取り換えられて、本来は性的な欲動が、今はもはや性的でない、社会的あるいは道徳的により高い評価を受ける業績の中に満足を見出すのである。(『精神分析』と『リビド理論』 p. 95)」「エネルギーはしかし——まったくか、あるいは大部分——性的な使用からそらされて、ほかの目的に向けられるのである。性的な原動力をこのように性目標からわきにそらして、新たな目標に向けること、それは昇華という名に値する一つの過程であるが、これによってあらゆる文化的な仕事をするための莫大な力の成分が得られる、という見解においては、文化史家たちも一致しているように思われる。(『性欲論三篇』 p. 43))。

フロイトの考えによれば、スポーツ活動、芸術活動、思考活動などは昇華によって生起することが多いのである。たとえばフロイトは、スポーツ活動に関しては、「文化教育は青年の性的快楽のかわりに運動の快感をあたえ、性的活動を彼らの自体愛的要素の一つに還元させている……(『性欲論三篇』 p. 63)」と述べている。また、芸術活動については「いくつかの性愛の源泉から生じた過度の興奮が他の領域に流出したり利用されたりする道が

開かれ、こうしてそれ自体としては危険なはずの素質から心的な作業能力のすくなくからぬ向上が生じる結果になる。芸術活動の源泉の一つをここに見出すことができる……（「性欲論三篇」p. 90）」と述べ、思考活動については「おそらく思考作業もまた、エロ的な衝動力を昇華することによって獲得されるのにちがいない。（「自我とエス」p. 289）」と述べている。昇華についてのフロイトの叙述が、自己実現とみなされる事柄のすべてを網羅しているわけではないが、自己実現の代表的なケースであるスポーツ活動、芸術活動、思考活動などが昇華によるものであれば、その発生機序についての説明は自己実現全般にも当てはまるものと考えられる。そして、マズローと異なり、フロイトが自己実現の欲求のようなものを認めていないとするならば、昇華の発生機序こそが自己実現の発生機序を説明するものとなり得ると考えられるのである。

昇華の発生機序

フロイトは昇華の発生機序を次のように説明している。まず、昇華のもとになるのは、性の「欲動」(trieb:「本能」とも訳される)である。性の欲動は本来、性的な満足を目指し、何らかの対象に対して性的な行動を行うことによって、目標を達成する。そして、その際の性的行動のエネルギーとなるものが、リビドーと呼ばれているものである。ところが、このような性の欲動の目標は、しばしば性的でない別の目標に振り換えられ、対象もその目標に合ったものが選ばれる。このように、性の欲動が本来の性的な目標と対象を別の目標と対象に置き換えた行動を発することが昇華の基本的な発生機序である。そして、昇華における目標や対象の置き換えによって生じる行動の、その過程においては、性的なものではないさまざまな目標や対象とさらに連結されたり、交換されたりすることにもなる。したがって、場合によっては、昇華される前の行動とは大きく異なった行動となって現れることもあり得ることになるのである。

このように、本来の目標とは異なる行動が発生する内的な機序として想定されているのは、心内に縦横に張りめぐらされている心的活動の回路の働きである。この心内の回路にリビドーが流れることによって、さまざまな活動が出現するのであるが、この回路は網の目状に多種多様なつながりを持っている。そして、性的な行動に直接関係がある回路も、性的とはいえない他のさまざまな回路とつながりを持っており、さらにそこから別の回路にもつながっていくのである。したがって、本来性的な満足のためのエネルギーであったリビドーは、性的な行動とはあまり関係のない行動を発生させる回路に流れ込むことにもなる。そうなることによって、性の欲動が基になりながらも性的なものとは直接的な関係の少ない行動が発生すると考えられる（「リビドーが移行してゆくさまざまな路すじははじ

めから互いに通じあっている管のような状態をなしている……(「性欲論三篇」p. 21)」「直接的満足から遠ざけられた本能要求は、その代理満足へと通ずる新しい回路をとることを余儀なくされるのであって、この回り路を経る間に性的な性質を失い、その本来の本能目標との結びつきが弛緩してくる。(「精神分析学概説」p. 204)」。

ここで、フロイトの想定している心的活動の回路は、認知心理学で考えられている知識表象のネットワークに似たものと考えることができる。すなわち認知心理学では、人間の知識表象の全体が無数の概念表象と概念表象間をつなぐ無数のリンクとから成る網の目状の構造になっていると考えられている。そして、知識表象が活動する際には、該当する概念表象が活性化されるとともに概念表象間をつなぐリンクを伝って関連する概念表象にも次々に活性状態が波及し、認知活動を支えていくのである(Collins & Loftus, 1975)。

ただ、知識表象のネットワークの概念表象は、それ自体が心的活動の作動を担うものとはいえないので、ここではむしろ心的活動を営む活動機序の構成ユニットのようなものを想定したほうがよいかもしれない。すなわち、心的諸活動はそれぞれの活動を営む活動機序の働きによって発生し、その活動機序はいくつもの活動構成ユニットの組み合わせから成っている。人は誰も心的活動を営むための膨大な数の活動構成ユニットを心内に保有しており、その各ユニットは相互にネットワーク状のつながりを持っている。そして、活動内容に応じて、必要な活動構成ユニットと各ユニット間のつながりが活性化され、いくつもの活動構成ユニットが組み合わせられて活動内容に応じた活動機序が構成される。この活動機序をフロイトのいわゆるリビドーが流れることによって活動が生じる、と考えることができるのである。

性の欲動と生の欲動

では活動のエネルギーとしてのリビドーを供給する性の欲動とは、一体どのようなものなのであろうか。フロイトの理論について最も批判が多く、またフロイトの理論に対して拒否感を覚える人が少なくない原因になっているのは、この性の欲動の概念がフロイトの理論の核になっている点にあるといえる。しかしながら、性の欲動について考えるにあたってまず留意しなければならないのは、フロイトのいう性の欲動は、いわゆる性欲とは異なるものだということである。性欲とはわれわれ自身が日常生活の中でその存在を実感したり体感したりできるものであるが、性の欲動はそれ自体を実感したり体感したりすることができない。いわば、高度に抽象的な概念なのである。

フロイトは欲動について、心理学的理解と生物学的理解の境界概念である(「心理学的理解と生物学的理解の境界概念として、「欲動」という語を回避することはわれわれにはで

きない。「(「精神分析への関心」 p. 232)」)、ある種のエネルギー量である(「われわれは欲動というものを、ある一定の方向へ押し迫って行くある種のエネルギー量であると考えます。欲動という名称は、この押し迫るということからきています。(「精神分析入門(続)」 p. 464)」)と述べ、さらに、欲動は意識の対象とはなりえない(「欲動は、意識の対象とはなりえない。ただ欲動をあらわしているところの表象だけが、意識の対象となりうるのである。(「無意識について」 p. 95)」)と述べている。したがって、フロイトの考える欲動というのは、きわめて曖昧模糊としたものであり、そのことはフロイト自身も認めている(「欲動論はいわばわれわれの神話学なのです。欲動というものは神話的な存在であり、途方もなく曖昧模糊としています。(「精神分析入門(続)」 p. 463)」)。フロイトの以上のような記述を踏まえていうならば、性の欲動は性欲となって現れるもともとの原基のようなものと考えてもよいかも知れない。

ではそのような実感、体感できない抽象的なものであるならば、なぜ「性の」欲動でなければならないのか。この点についてもフロイトの見解は曖昧である。一時期フロイトの弟子でもあったユングが、リビドーを性に関するものに限らない一般的な心的エネルギーととらえたことに対し、フロイトははっきりと異を唱え、ユングのそのような考えがこれまでのフロイト自身の精神分析的考察のすべてを否定するに等しいことだと断じた(「C. G. ユングの先例にならって、リビドーを心的欲動のエネルギー一般と一致させ、リビドーという概念自体を発散させてしまうならば、これまでの精神分析的観察によってえられたすべてのものを放棄してしまうことになるのである。(「性欲論三篇」 p. 74)」)。ところが、それにも関わらず、フロイトは後年には性の欲動を包含する欲動として「生の欲動」という概念を提示した(「生命そのものをさらに長期にわたって保存するのであるから、より広い意味でも保守的である。つまり性的本能は本来生の本能である。(「快感原則の彼岸」 p. 175)」)。この生の欲動という概念には性に関わる部分も含まれてはいるが、性の欲動よりもさらに概念が抽象的なものとなっているのは明らかである。

フロイトが性の欲動の概念をより広く、より抽象的な「生の欲動」という概念に置き換えた理由については色々なことが考えられるが、昇華との関わりについて考えてみると、人間の行うさまざまな行動が昇華によって発生すると考えることが可能であるならば、なぜそのもとになっているのが「性の」欲動でなければならないのかが、判然としないのも事実である。もちろん、芸術活動や芸術作品などにおいては、性的なテーマを扱ったものや、性的な動因が潜んでいることを推測できるものも少なくない。それらについては、性的な欲動の昇華とみなすことができるであろう。しかし、スポーツ活動や思考活動などにおいて、すべての活動の奥に性的な欲動が潜んでいると解釈することは、不可能ではないにせよ、かなりの無理があるといわざるを得ないのではないだろうか。性的なものを排除

する必要はないが、より包括的な欲動を想定した方が、説明もつきやすいのではないかと考えられるのである。

では、フロイトのいう生の欲動はそれに該当するものなのであろうか。フロイトの考えている生の欲動とは次のようなものである。第1に生の欲動には、性の欲動のほかに自己保存の欲動も含まれている（「それは、阻止されない本来の性本能と、そこからみちびかれ目標を阻止され昇華された本能をふくむだけでなく、自己保存本能をもふくむ。（「自我とエス」p. 285）」）。第2に、生の欲動の本質的な働きは、2つの細胞体を融合させることである。この働きによって、生命が維持され、更新されていく。第3に、このような生の欲動の働きは、死の欲動に抗するものである。死の欲動は、生命体を解体し、生命の無い物質の状態に戻そうとするものである（「生物学に根拠をおいて理論的に考察したあげく、われわれは死の本能を仮定した。この死の本能に負わされた課題は、有機的生物を生命のない状態にひきもどすことである。これに反して、エロスは、分解されて分子の状態になっている生ける物質を、ますますひろく集合させて生命を複雑化し、そのさい、もちろん生命を保持しようという目標を追っている。（「自我とエス」p. 285）」「ついで思弁は、このエロスは生命のはじめから作用しているものであり、また「生の本能」として、無機物が、生命を獲得することによって発生した「死の本能」とは正反対なものであるとする。思弁はこれら二つの、そもそものはじめから相争う本能を仮定することによって、生命の謎を解こうと試みるのである。（「快感原則の彼岸」p. 192）」）。

このように、フロイトは生命体の存在および活動を、生の欲動と死の欲動とのせめぎ合うものとしてとらえ、死の欲動に抗する働きをするものとして生の欲動を位置づけている。生の欲動にこのような位置づけを与えることや、生の欲動の対立概念として死の欲動を想定することの可否については、ここでは論じるのを控えるが、少なくともこのようなとらえ方が心理学の範囲を超えかけていることは明らかである。そして、生の欲動の本質が細胞体の融合という働きにあるという考え方は、昇華の発生機序を説明する上ではあまり有効であるとは思えない。では、昇華の発生の基となるものはいったいどのようなものなのであろうか。

生の力

ここで、フロイトが性の欲動のより本質的包括的な概念として生の欲動というものを提示したことを重視するならば、やはりそれは生命や生に関わるような根源的なものと考えてよいであろう。しかし、生命や生といった概念は既に心理学の扱う範囲の限界にまで達しているものであり、心理学の範囲内の考察にはおさまりきらない哲学的な概念といえる。

では哲学の方面では「生」や「生命」というものをどのようにとらえているのであろうか。

ニーチェは、生の営みの根本原理となるものを「力への意志」(Wille zur Macht : 「権力への意志」とも訳される)と呼んでいる。この「力への意志」についてニーチェは「権力への意志は原始的な欲情形式であり、その他すべての欲情はこの意志によって形成されたものにすぎない(『権力への意志(下)』 p. 184)」「すべての駆りたてる力は権力への意志であり、これ以外には、いかなる物理的、力学的、心理的力もない(『権力への意志(下)』 p. 184)」といった心理学的な説明を述べながらも、力への意志は人間の生のみならず、動物および有機的生命のすべての生の根本原理でもあることを論じている(「動物にあつては、すべてのその衝動を権力への意志から導出することは可能である。有機的生命のすべての機能をこの唯一の源泉から導出することも同じく可能である。(『権力への意志(下)』 p. 131)」。そして、ニーチェは「生そのものが権力への意志なのだ(『善悪の彼岸・道徳の系譜』 p. 33)」と断じ、力への意志が生と一体になっていることを論じている。さらにニーチェは「生はたんに権力への意志の一つの特殊の場合にすぎない(『権力への意志(下)』 p. 188)」、「この世界は権力への意志である(『権力への意志(下)』 p. 465)」と述べ、力への意志の原理の適用範囲を著しく拡大している。

一方、ベルクソンは、生命を「流れ」としてとらえている(「生命は、本質的に、物質をつらぬいてほとぼしる一つの流れであり(『創造的進化』 p. 300)」。そして、その流れは、世代から世代へと受け継がれていくものであり(「生命とは、成長した有機体を媒介として胚から胚へ移りゆく一つの流れのように見える。(『創造的進化』 p. 46)」、また、発生以来、長い期間の中で多種多様な種を生み出してきている(「生命の流れは、……世代から世代へと移って行きながらいろいろな種に分裂しさまざまな個体に散らばった(『創造的進化』 p. 45)」。さらにこの生命の流れは、個体の中では、発達的变化の推進力となっている(「胚の発達と完全な有機体の発達とのあいだには、間断のない連続がある。生物を成長させ発達させ老化させる推進力は、その生物に胚生活の諸段階を経過させた力と同じものである。(『創造的進化』 p. 37)」。生物の発達的变化や活動のエネルギーの発生源は太陽である(「動物は植物から太陽エネルギーを、あるいは直接に、あるいは動物同士のあいだで受け渡しをすることによって、借用するにすぎない。(『創造的進化』 p. 287)」。そして、こうしたエネルギーを蓄積することと、放流することが生命の基本的性質である(「生命全体は、その本質において、まずエネルギーを蓄積し、ついでそれを従順で変形可能な径路に放流しようとする一つの努力であるように思われる。(『創造的進化』 p. 288)」。)

ニーチェは生の根本原理として「力への意志」という概念を創出し、自身の哲学の中核的概念に据えている。また、ベルクソンは、生命を流れとしてとらえながら、その流れを推進するエネルギーを蓄積したり放流したりする営みとして考えている。このような哲学

の考えを踏まえるならば、人間の活動や生の営みの根源に、フロイトが生欲動として概念化したものよりもさらに抽象度の高い概念を措定することが可能であろう。それは人間の諸活動が発生する土台となるものであり、人間の諸活動や生の営みにエネルギーを供給するものであろう。それをここでは「生の力」と呼ぶことができるかも知れない。

自己実現の発生機序

以上のような考察に基づいて、自己実現の発生機序を考えてみると次のような素描が可能となる。すなわち、心身の諸活動は活動機制を構成する大小さまざまな活動構成ユニットのようなものが組み合わさることによって生み出されている。そして、個々の活動構成ユニットは他のさまざまな活動構成ユニットとつながっており、活動内容に応じて、必要なユニットが相互のつながりを介して組み合わされて、特定活動の活動機制が構成される。この諸々の活動構成ユニットは、性的な活動に直接関わるものもあれば、性的な活動とは関係の少ないものもある。性的な活動に関わる諸ユニットが作動することによって、性的な行動が発生するが、性的な活動と関係の少ないユニットが作動することによって性的なものとはあまり関係のない行動が発生する。フロイトのいう昇華とは、本来性的な活動の構成ユニットを作動させるものであるリビドーが、ユニット間のつながりを伝って性的ではない諸ユニットを作動させたときに生じるものと考えることができる。そして、性的であるか否かを問わず、自分の持てる諸々の活動構成ユニットを作動させることによって、何らかの意味ある行動が発生させたとき、それが自己実現となるのである。もちろん、自己実現の規模の大きさによって、必要となる活動構成ユニットは多くなるし、ユニット間のつながりも多くなる。しかし、ユニットそのものもユニット間のつながりも、必要に応じて、また本人の成長や努力によって、自分で生成していくことができる。必要な活動構成ユニットやユニット間のつながりを自分で生成していくことは、より規模の大きな自己実現につながっていく。性的な活動に関わるもののように、多くの人が共通して持っている活動構成ユニットもあれば、趣味や仕事に関するもののように、人によってさまざまに異なっているユニットもある。また、どのような活動構成ユニットやユニット間のつながりを多く持っているかは、人によってさまざまである。このことが、人それぞれに内容や形式の異なった自己実現を生み出している。

そして、自己実現を発生させるエネルギーは、性的な活動のためのエネルギーに限定されない。それは、性の欲動を包含する生の欲動、または生の力によって供給されるエネルギーである。以上のような考えを踏まえるならば、自己実現とは、「生の力」によって駆動され、人の持っている能力や本性を発揮していく生の自然な営みであるということがで

きるかもしれない。

引用文献

- ベルグソン, H. 松浪信三郎・高橋允昭(訳)(2001). 創造的進化 ベルグソン全集4《新装復刊》白水社
- Collins, A.M., & Loftus, E.F. (1975). A spreading-activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, **82**, 407-428.
- フロイト, S. 懸田克躬・吉村博次(訳)(1969). 性欲論三篇 フロイト著作集 第五巻 人文書院 pp.7-94.
- フロイト, S. 井村恒郎(訳)(1970). 無意識について フロイト著作集 第六巻 人文書院 pp.87-113.
- フロイト, S. 小此木啓吾(訳)(1970). 快感原則の彼岸 フロイト著作集 第六巻 人文書院 pp.150-194.
- フロイト, S. 小此木啓吾(訳)(1970). 自我とエス フロイト著作集 第六巻 人文書院 pp.263-299.
- フロイト, S. 懸田克躬・高橋義孝(訳)(1971). 精神分析入門(続) フロイト著作集 第一巻 人文書院 pp.385-536.
- フロイト, S. 小此木啓吾(訳)(1983). 精神分析学概説 フロイト著作集 第九巻 人文書院 pp.156-209.
- フロイト, S. 木村政資(訳)(1983). 精神分析への関心 フロイト著作集 第十巻 人文書院 pp.219-239.
- フロイト, S. 高田淑(訳)(1984). 「精神分析」と「リビード理論」 フロイト著作集 第十一巻 人文書院 pp.78-97.
- マズロー, A. H. 上田吉一(訳)(1973). 人間性の最高価値 誠信書房
- マズロー, A. H. 小口忠彦(訳)(1987). 改訂新版 人間性の心理学 産業能率大学出版部
- マズロー, A. H. 上田吉一(訳)(1998). 完全なる人間〔第2版〕魂のめざすもの 誠信書房
- ニーチェ, F. 原佑(訳)(1962). 権力への意志(下) ニーチェ全集 第12巻 理想社
- ニーチェ, F. 信太正三(訳)(1967). 善悪の彼岸・道徳の系譜 ニーチェ全集 第10巻 理想社